

津田昇平教話 第二十話

令和三年一月二十日 朝の教話

ご恩を忘れたら、自分が自分を忘れたも

同然じゃ。

おはようございます。令和三年一月二十日をお迎えさせて頂きました。
昨日は「信心のはじめを忘れなよ」という教祖様のご理解、大事に、参
つてきた氏子うぢこに教えて下さった、大切なご理解であると感あじさせて頂
いております。

「信心のはじめを忘れなよ」というのは、信心はじめは皆おかげを頂
きたいと必死ですので、この神様と思って熱を上げて、ほれ込んで打ち
込んで一心におすが縋りさしてもらおう。信心を求めさしてもらおう。だからこ
そ、おかげを頂けるような、そういう自分にならせて頂ける。器うつができ
る。

ところが、おかげを頂いたら喉元のどもとが過ぎたという感じになりますね。

また信心を忘れて抜けて身勝手になり、信心に重みがなくなり、軽くなり、ええ加減になり、そしてまたおかげを頂けるような自分から、せつかくね、神様におかげ頂いてお導き頂いて、おかげを頂けるような自分になっていたのに、おかげを頂いてしまうと油断になり、そしておかげを頂けない難儀なんぎな頃の自分にまた、知らず知らずのことも含めて戻もどってしまう。

そういうことがないように、信心のはじめを忘れないようにとということをお仰っておられたわけですね。これはまあ信心して数年の人っていうんじゃないかって、死ぬまでそれを大事にさして頂かんといかなあ、偉そうにならんように謙虚けんこな心で過あやさして頂かんといかんという教祖様

の大切なご理解やと思わして頂きます。

今日はもう少し、それを深めていかしてもらおうかなという気になりましたんで、そのようにお話しようと思います。

教祖様のご理解で、

「この神様のご恩が忘れられますものかいな。寿命じゆみようをつないでいただきましたのですもの。これを忘れたら罰ばちが当たります。一生忘れませぬ」と、よく高言こうげんする者があるが、よう覚えておらぬと、後から後から忘れるぞ。「この大願成就のおかげをくだされば、金の鳥居をさしあげま

す。絹のお幟のぼりをお供え申します」と言うたりする者があ
るが、さあ、おかげを受けると、金の鳥居が小さいなまこ
（トタン）の鳥居になったり、絹のお幟が紙になったり
するのが、だんだんある。神様はそんな物をもらおうと
は思わっしやらぬが、もったいないことじゃ。けれども、
一生忘れように忘れられぬようなおかげを受けながら、
そのご恩を忘れたら、自分が自分を忘れたも同然じゃか
ら、つまらぬ、もったいないことが、またできてきて、わ
が身が立ち行かぬようになるかも知れぬ。

というご理解がありますね。

仰ってることは、昨日の「信心のはじめを忘れないように」ということに繋が^{つな}がってくるわけですけど、これは具体的にある方のお取次^{とりつぎ}、何人かのお取次の経験から仰っておられるんでしょう。これはまあ、私もよく分かります。もう少し解説していきましようかね、み教えをね。

『「この神様の「ご恩を忘れられますものかいな。寿命^{じゅめい}をつないでいただきましたので。これを忘れたら罰^{ひは}が当たります。一生忘れませぬ』と、よく高言^{こうげん}する者がある。「……」「高言^{こうげん}する」というのは、まあ偉そうに大きなことを言うことですね。上から目線^{めせん}って言いますかね。もう偉そうに、大それたことを言うという事です。

言ってはるこの人もですね、正しいことは言ってるんですよ。なんにも間違ってるない。「神様のご恩を忘れられるもんですかいな。もうなかった命を助けて頂いて、寿命をつないで頂いたんですからね。これを忘れたら、それこそもう天で頭を打って罰が当たります。もう一生私は忘れません。このご恩を忘れたら、んなもうあきませんわ!」っていうことですよ。全部正しいですもんね。

結局、教祖様が仰ることもその通りなんですよ。だからよう分かってるんです。つまり、教祖様が仰ってることをこの人は全部よう分かってるんです。よう分かって、よう言ってはるんです。その通りですもんね。

これ、教祖様の言葉やと思ってみたら、もうそのまんまちやいますか。

「この神様のご恩を忘れてはなりませんよ。寿命をつないで頂いたので
すから。これを忘れるようなことがあったら神様から罰は当たらんでも
天で頭を打ちますよ。いいですか、神様のおかげを、ご恩を忘れんよう
に、一生忘れないようにしましょうね」って言われたら、これ教祖様の
ご理解そのまんまでしょ。教典にいっぱい出てきますよ。

そうなんです。みんな分かかってるんです。その通りなんですよね。け
れども、こういう「よく高言する者があるが、よう覚えておらぬと後か
ら後から」「この「後から後から」っていうところがねえ、ほんとにある
わけですよ。「後から後から忘れるぞ」「そうなんです。そんな時はそう思
ったんでしょう。けれども、よう覚えておらんと、後から後から、一年経

ち二年経ち、三年、五年、十年……後から後から忘れるんですよねえ。

またある氏子うぢこは、「この大願成就のおかげをくだされば」、大願成就、

『金の鳥居をさしあげます。絹のお熾のほりをお供え申します』と言うたりする者があるが、「まあそれぐらい神様のおかげを頂いた、もう自分の中の大願、大きい、本人の中での大きな願い、そういう成就を願い、神様がそのようなおかげをお授け下さった。もしそうなったんであれば、もう他は、私はもう何もいりません、もう全財産出してもその金の鳥居を神様にお礼申し上げます。絹のお熾でも。普通はまあ、熾かせんというのは綿が多いでしょうねえ。まあ最近やったら化繊かせんもあるでしょうね。絹の熾

つていらつのはそつしつあるものではめりませんね。でもそつしつ高価な、当時であればもっと高価でしょう。」とお金の鳥居を差し上げる。絹の幟をお供え申し上げます。「お礼にね、というへらりの者がある。よへあるんでしょうね。

とつろがです、「まあ、おかげを承けると、金の鳥居が小せいらつたんの鳥居になったり、絹のお幟が紙になったりするの、だんだんある。」。ねえ、おかしな話で笑っちゃいますけど。「まあ、おかげを承けると」「ってまあほんとにね、ちょっと笑ってしまってるんでしょつかねえ、まあ笑うに笑えないようなことですが。

それぐらい、「神様のおかげを頂いたら、もうあとは何もいらしません。

もうこのお願いさえ、「まさに大願なんですからねえ、大願、大きな願いなわけで、もうこれがなかったらあとは何も成り立たない。命もそうやし、家族もそうやし、仕事もそうやし、もうそれが何にもあとのおかげがついてこない、もうこのおかげがないと話にならんという、そういうのがもう大願でしょうねえ。

「そういうおかげ下さったんやったら、もうあとは何もありません。全ては命あつてのこと、おかげあつてのことなので、もう何でもかんでもできる限りのお供えさしてもらおう。金の鳥居をお供えさしてもらおうし、絹のお幟をお供えさしてもらいます」「って言うてたんやけれども、おかげを頂いた途端とたんに、「金の鳥居」って言うてたんが、トタン、まあトタン

ですからねえ。「トタン」って分かりますかね。大人の方は分かると思いますけど、今の現代で言うたら、トタンっていうたらまあ、波打ってるようなトタンですわね。屋根瓦やねがわらとかそういうこう、銅板の屋根とかっていうんじゃないかって、まあほんとにあの、薄ーい波を打ってるようなものですね。簡易的になって言うたら簡易的なものでしょう。ま、今の時代はそれなりにしっかりしてるものも多いとは思ってますけれども、まあ当時であれば、もっと弱いものっていうことがあったやろうと思いますわね。すぐに壊れてしまいかねないところがあるでしょう。そのような鳥居になったり、金の鳥居がトタンの鳥居になる。で、絹のお幟が紙になったりする。ってこういうふうなことがまあだんだんある、まあよくある

とららうじやうじょう。

「神様はそんな物をもらおうとは思わっしやらぬが、もったいないことじゃ。」「もったいない」「ってどういいうことでしょうかね。」「もったいない」「っていろんな、いくつか意味があるでしょう。」

「一つは、ほんとにね、大事なものといいますが、意味のあるものなのに無駄むだにしてしまうような、まあ「それが惜おしいなあ。だからそれはもったいない。捨てるのはもったいない」とかね。人でも、「使わないで置いとくのはもったいない人や」とか、まあそういうことありますわね。とても役に立つと。なのに、そのまんまに、無駄むだにしまったり捨て

てしまったりするの、とても惜しいというのを、「もったいない」と言う。そういう意味合いが一個ありますね。

でもここでは、「もったいない」という意味がちょっと違うでしょうね。

二つ目に、もったいないは「畏れ多い、もったいない」ということもあり
ますね。「有あの難がたき、畏れおそれ（恐おそれ）多おほき、勿もつ体たいななき、まあの「もったい

なき」というのもちよつど、自分の身分には不相ふ相そ応うなものものを頂ういて、もっ
たいない、畏れ多いというのですよね。相あ濟いますないと言いいますか、か

たじけない、「こんなものを頂けるような自分じゃないのに、こんなものを
頂いて本当に勿体ない。もつどのようにお礼申し上げていいのやら分
かりません」という、こういう感じですよ。かたじけないような、畏れ

多いような、これを「もったいない」と言う。でも、ちょっといいでも少し違いますね。

じゃあ、「もったいないことじゃ」「ってどういことかかって言うたら、次の意味でしょう。「不都合である、不届きである、もってのほかである」「そういう言葉の意味があるところじゃですね。

「神様はそんな物をもらおうとは思わっしゃらぬが、もったいないことじゃ」「不届きである、もってのほか。じゃあ「不届き」ってどういうことかかってなりますね。まあまあ大体のことは分かって生活してますけど、調べてみましたらね、これも不届きは二つある。まあ一つは不行き届きですね。配慮や注意の足りないことを「不行き届き」っていうこと

がある。でも、ちょっとこれ違いますわね。次のことではしょうね。「道や法に背いた行為（そむ）をすること、またそのさま。不届（とど）き者」ということを書いてますね。

道や法に背いた、「道」っていうのはどういうことかって言うと、まあ天地の道ということですね。天地（てんち）の道理（とつり）、神様の道。じゃあ「法」っていうのは何かって言うと、仏法（ぶつぽう）でしょうね。まあ神道で言ったら天地の道、神の道ですし、法（ほ）って言ったならまあ仏法のことでしょう。仏法っていうのは要するところ、御道（おみち）で言ったら天地の道理で、仏の説かれたものですね、その道でしよう。

だから天地の道、神様の道、仏の、仏法の理（り）に背くような、道から逸（そ）れ

てるような、そういう行為、そのままですね。逸れてしまって、道を外してしまって、まあそういう醜みにくい行為、汚い行為、そういうことですね。それをまあ「不届き」っていうわけであり、それがもつたいたいということですね。

不届きである、もつてのほかである、教祖様からご覧になったらそう、神様からご覧になってもね、そろそろでしよう。大体、ご本人だつて最初はそれくらいおかげ頂いたらって言うことだったんですからね。初志貫徹しよしかんてつすればいいんですけど、まあもつたいたいなことじゃ。うーん…

…。

けれども、ここからまた大事ですね。「一生忘れように忘れられぬよう
なおかげを受けながら」、「自分がですよ」、「そのご恩を忘れたら」、「ご恩を
忘れる」、「自分が自分を忘れたも同然じゃから、つまらぬ、もったいない
ことが、またできてきて、わが身が立ち行かぬようになるかも知れぬ」。
そうですね、誰がおかげ頂いたって、まあ自分ですからね。一生忘れよ
うにも忘れられないようなおかげを受けながら、そのご恩を忘れる。恩
知らずとごうじやごうじや。

「おん恩」といふ言葉もめりますね。恩を忘れるといふ漢字で、返り点付
けて頂いて、「恩を忘れる」で「おん恩」といふ言葉もありますね。まあよ
く私も、おん恩とごうじやの好一番感とごうじやをよへ言ひますね。忘

恩というのは、めぐりを積んで徳を蹴散けちらしますからね。

ですから、「この恩を忘れないように」ということは、本当に天地の道理です。天地の道ですね。先ほど、道や法に背そむくようなそういう行為、これがもったいないということでしたけど。「自分が自分を忘れたも同然」、じゃ、自分が自分を忘れたってどういうことですかね。私という人間が私という人間を忘れる、これどういうことですか。自分が自分を、じゃあどんな自分を忘れたってことを言うんですか？　自分がどんな自分を忘れたのか。

ま、これは二つあるでしょう。一つはですね、そもそも自分は難儀なんぎであったということ。「大願成就や、もう金の鳥居でもなんでも差し上げます

から「って、「もう」恩は一生忘れませんから、こんなん忘れたら罰当たり
りませ「というぐらい、それぐらいの本人にとっては、もう生きるか
死ぬかの、自分だけじゃないでしょうね、自分だけじゃそうはいかんで
しょう。自分は当たり前前のこととして、自分にとって大事な存在、家族
であったり先祖であったり家だったり、あるいはお商売やったら従業員
やらも含めて、皆でしょうね。皆、このおかげ頂かんかったら立ち行か
んようになるということ、それぐらい本人の人生にとって、これがあつ
たら道が何とかつくし、これがなかったら、おかげ頂かんかったら全て
が崩れ去くずってしまう。まあそういうことです。

そういう難儀むづかしいに陥おちいっていたということ。そしてね、「自分が自分を忘

れる「っていう、その「自分」っていうのは、もうどうにもめぐりが深く、
て、難儀でどうにもならない自分を忘れるっていうこと。めぐりが深くて、
深い難儀で苦しむ自分というのは、苦しむような生き方、心がけ、性根しやうね
になって、性根が悪い、汚れている、穢けがれている、そんな自分で一生懸命いっしやうけんめい
生きてるけれども、道から外れて難儀にならざるを得ないような、そんな
救いようがない、誰にも、自分にも。そんな自分であった、その自分を
忘れてるんやということでしょう。「自分を忘れたも同然」っていうのは。
難儀やった自分を忘れてるということなんです。難儀な生き方しかでき
ないような、救いようがない自分であったということをおぼえてるとい
うこと。当たり前でしょう、これね。だから救いを求めて参ってきてる

んでしょう？　こんな当たり前のことを忘れるんですからねえ。これが一つ。

もう一つ、どんな自分を忘れるか。今度は、信心させて頂いて、お参りしてお取次とろしやく頂いて、金光様に御理解頂き、お祈り添え頂き、おかげの作たくり方が分からぬ救いような自分である、それをお救い頂けるために、親身になって実意じつい丁寧にお話聞かせて下さって、なかなかできないような、作り方が分からないようなところも教えて頂き、手取り足取り教えて頂き、お許し頂き、手間暇てまひまかけて頂いて、そうして神様がおかげを授けて下さって、ようやくおかげを頂ける。おかげを頂いた、助けて頂いた、救って頂いた、そんな自分でしょう。そんな自分を忘れると

いうことでしょうか。そういう、お救い頂いた自分であることを忘れるということは、お救い頂けるような、おかげを頂けるような信心、生き方、性根、心がけ、心の器を忘れてしまうということなんです。

自分が自分を忘れるというのは、まとめるところですよ、二つあって、これまで苦しんでどうにもならなくて、救いようのないような自分であったということをおぼれる、そんな自分であるということ。もう一つは、信心させて頂いておかげを頂いて、こんなにもったいないことはない、そういうおかげを頂けるような自分、信心をさせて頂いている自分、してらんじゃない、させて頂いている、そういう自分を忘れるということですよ。

「これまで苦しかったことと、今おかげを頂いてありがたいことと……」
っていう教えがありますけれどね、その二つを忘れたらいかん、どちらか一方でも忘れたら同じ病になるっていう教えがありますよね。

（「今まで長う痛うてつらかったことと、今おかげを受けてありがたいことと、その二つを忘れなよう。その二つを忘れさせにや、その方の病気は二度と起こらぬぞよう」〔理解 I 荻原須喜 六より抜粋〕参照）

おなじじことです、ここで仰ってるのはね。自分が自分を忘れたも当然である、ご恩を忘れたら。一生忘れように忘れられないようなおかげを受けながら、そのご恩を忘れて、自分が自分を忘れたも同然じゃから、

つまらぬ、しょうもない、もったいない、ご無礼な、不屈きな、道から外れる。そういうことがまた出てきて「わが身が立ち行かぬようになるかも知れぬ」、「かも知れぬ」の後に(「……」)って感じてしようね。ま、ちよっと私は「かも知れぬ」ってところで笑ってしまいますけれど、まあでも、そら間違はなく天地の道理ですから、そんなことやって道がつかずがないんですよ。だから千パーセントですよ、こんなんは。

でもまあ教祖様は「そういうふうにしてなる、かも知れんで」って。まあ逆に、こんなふうに「かも知れんで」って言われる方がよっぽど怖いですよね、ええ、ソクっとします。そら教祖様は全部ご存じでしょうね。まあでも、もう言い切ったりせず、「そないなるかも知れんから気いつ

「けや」って、まあやっぱりそう言います、私もね。確信はあっても、だって道理ですからね、なるかならんとか、まあそれしかないですからね。そんなこと、それ自体が道から逸^それて、まあ言うたら大きな罪を作ってるわけですから。助けて頂きながら、苦しんできた自分やらおかげを頂いてきた自分、苦しむような生き方しかできなかった救いよのない自分、おかげを頂いて、信心^させて頂いて、そしておかげをお授け頂いた、そういう生き方の自分。そんなんを忘れてしまつて。もうそれ自体が恩を忘れてね、そんなことをしててめぐり積んでるんですから、おかげを頂いてめぐり積んでるんですからね、まあそろどうしようもないでしょ。

けれども、こういうことが多いし、また難儀なんぎなことになる。おかげを授けるのんだって大変なんですからね。で、授けたおかげを大事にしてくれたらもうそれでありがたいなあと思うし、恩を忘れずに「ありがとうございます」ってなって当たり前なところを、ほんとにご無礼な生き方、まあ要するところ身の程が分かつたらいいでしょう。自分のことが分かってないんでしょうね。自分がごんだけ偉いかと勘違かんちがいしてるんですよ。だから、こんなふうにしておかげを頂いたら、後になって後になってありがたいのが大きくなるんじゃないかと、ありがたいことが抜けていく。これ、自分を拜んでるからですよ。神様を利用するだけで使い捨てなん

ですよ、てんちかねのかみ天地金乃神様をね。天地金乃神様でも使い捨てなんですから、こんこうだいじん金光大神様なんてもっとでしようね。

そういうふうなことをするから、てんち天地の道理、とつり天地の法律に完全に触れるから、しかも命を助けて頂いて、自分だけじゃない。家族であったり、先祖であったり、救われぬ者皆救って頂けるようなおかげを頂きなから、その恩を忘れてしまふんですから。そんなん言っても、「いや、恩なんて忘れてないんですよ」って言うんですけどね。まあいいでしょう。そういうふうな相済あひすまんこと、もったいないこと、つまらんことにならんように、信心のはじめを忘れないように、ということをやっぱり仰るんですよね。そこが大事ですよ。

おかげを頂くまでは、「もう何があっても、もう全て投げ出してでも神様にお礼をさして下さい」「って言うのに、おかげを頂いたら、「ああ、やっぱり惜おしいなあ」と。結局惜おしいんでしよう。」「金の鳥居差し上げます」とかね、お金かかりますもんね。

ま、普通に考えて金の鳥居なんてお供えできないくらいですよ。とんでもない金額ですよ。絹の襦すだってそうそう買えるもんじゃないでしょうね。でも結局のところ、そんなもう最初はね、「お金なんかよりもどうぞどうぞ」と言うてたんですが、おかげを頂いた途端に、「お金惜おしいな、もったいないな。こんなん神様に供えたくないわ、もったいないもん。神様になんてそこまでせんといかんの」「要するところ、そういうことなん

ですよ。やってるのがそうですからね。

つまり、欲しい惜しいが結局またむくむく出てくるんです。で、まあもっと言わしてもらったら、そういうふうな我情我欲がじょうがよくという生き方をしてきたから難儀になっとるんです。だからほんとに何もかもを捨ててしまわんといかんような、救いようのない自分の生き方がそういう生き方なんです、そもそも。だから元に戻ってるんです。元に戻ってるってことは、自分を忘れてるんでしょ？　そういう難儀であった自分も忘れてるし、そこから救って頂いた、生き方を教えて頂いて。それも忘れてるんでしよう、助かったから。

ほんでね、おかげを授けて、で、おかげを頂いたんやから信心が強う

ならんといかんのに信心が弱うなつてしまつてねえ。二代金光様のみ教えがありますね。

みな、おかげを受けたら、信心が強くならなければなら
ないのに、信心が弱くなる。

〔二代金光様のご理解 一三四一〕

つて教えがありますけれど、おなじことですね、やっぱりね。ほん
とに多いんですよ。

で、私ね、この人ほんとにいつもおかげを頂いて、ほんまに困った

時だけ来て、「おかげ下さい」「言うて、ほんでお取次とりじきさしてもらって、信心教えて、ほんでおかげを頂いたら、おかげ頂いたら最初だけちよっとお参りして、後はまたいなくなるんです。ほんで数年経ったらまた来て、「立ち行かん、助からん」。ほんでまたそんな時だけ、最初はもう一ヶ月くらい日参にっさんして信心しておかげ頂いたんが、次はもう神様、三ヶ月くらい信心させますね。そしたらやっぱりまたおかげ頂いた。ああ、すごいおかげ、大みかげやなあ。でもね、やっぱりお礼参りもしばらくしたら、一週間もせんうちにまた来なくなつて。ほしたらどないなるかって、やっぱりおかげを落とすんですよ。で、次はって言うたらね、三ヶ月でも済みませんね。まあ半年とか一年くらい参らせようと思えますね、神様は。

つまり信心が根付いてないんですよ。付け焼き刃なんです。もっと言うたら、神様を利用するだけであって、本当に神様を頂く気がさらっさらない人間です。残念なことですけどねども。まあ「めぐり、めぐり」「って、先祖のせいばかりにしてるわけにもいきませんからね。だって散々教えて頂いてるんですから、本人の問題も多々あります。そこをまた、教え足してもらっていく、神様が教えて下さる、おかげも授けて下さる。で、その人がまたね、半年やら一年って、また頑張がんばってお参りしたら、「ああ、おかげを頂けるような信心になってきたなあ。この人も性根あひみじ変わった」、こっちも信じますよ、あはやからね。そしたら「おかげ頂いて、ああよかったなああって喜ばしてもらおう。じつじつとにならんように、

ほんまに忘れたらあかんで、「まあ、毎回言ってるんですよ。」信心はじめ忘れたらいかんで「これまで苦しかったこと忘れたらいかんで」「今おかげ頂いてありがたいこと忘れたら……」、「おかげを頂く前から散々言いますよ。耳にタコができるように、こっちは口にタコができるぐらい言ってるんですから。」はい！ 本当に、本当に「って言うんですけどね、あきませんな。やっぱり頂いたらね、また中途半端になって、しばらくしたらすべにいらなくなりますよ。」

そういうのを見てるとね、果たしておかげを授けたほうがええんやら悪いんやら、分からんようになってくるんですよ。これ、おかげを授けるからめべり積ましてるんやらよかっていう気になってきてね。神様もね、

こら悩むなあと思って。おかげ授けてあげたいと思うけど、おかげ授けたら、授けたおかげを元手にしてめぐりを積むんですから、そしたらもつとめぐりが深くなるでしょう。

じゃあこれ、おかげを授けた方がよかったんやろか、おかげを授けるほうがええんやろうか。いや、しかし待てよ、おかげ授けたらどないなるか分かる。ああ身勝手な信心になって、また恩を仇あたで返して、忘恩ほうおんして、さらにめぐりを積んで、大変なことになるなあ。そしたらもうおかげ授けん方がいいんやないやろか……っていう気にさえなってくる。おかげは頂けんけれども、おかげを頂きたいと思って、信心熱心に参る時が一番ええんですよ。もうその状態のまんまの方がええんやないや

ろうか。

おかげは頂いてないですよ。おかげは頂いてないけど、おかげを頂きますような信心になる。じゃあ、おかげを頂いたところでピタッと止まってくれたらいいんですけどね、すぐ落ちるんですよ。おかげが重いんでしょかなあ。信心が上がってきてるのに、おかげを授けたらおかげの重さでだんだんだんだん飛ぶことができずに、それで墜落つひんするんですかなあ。もったいないことですよなあ。

けれどもそういうことはまあ、ようありますんでね、お互いに気を付けさせてもらわんとあきません。うーん、可愛いそう、可愛いそうって言うても、そんなことをする人もかわいそうって、まあそらそうです。

でも、そんな誰たれだってそうですよ。だって、かわいそう言いましてもね、ほんとにかわいそうなのは、御神縁ごしんえんを頂いてない人がかわいそうですね。散々おかげを頂いて、教えて頂いて、お導き頂いて、それでも立ち行かん。先祖の徳を掻かき集めて御神縁頂いて、教えて頂いてるのに、それも蹴散けちらしてしまう、それ、身から出た錆さびですよ。

一番気の毒なのは神様ですよ、これね。ほんとに神様はお気の毒です、ほんとにね。もう一時私わたくしもね、こんな感じがいっぱい、もうずーっと見てるとね、もうほんつとに三六五二四時間、神様にね、お詫わびしかできない時ありましたよ。何年間かありましたね。お詫わびしかしてないです、氏子うぢこのごことで。だから自分のご祈念なんてお礼もお願いもできん、

もうただただお詫びしか言ってますん。」あの氏子がこんなんでも申し訳ありません「……言いませんよ、いちいち氏子には。そやけどもう、ただただお詫びしかない。お詫びお詫びお詫びお詫びお詫びお詫び、いくらお詫びしても足りんべいらい。

それぐらいおかげ頂いてるのに、人間は薄情やなあと思ひましてね。もう神様がお気の毒で、相済まんあいますくって、申し訳なくって。私だって、氏の願ひを受けて神様にね、「どうぞこの氏子がおかげ頂いたら信心しますんで、信心させますので、どうか、かわいそうなんでおかげを授けて下さい」ってお願いしますでしょ。で、おかげを頂いて、「ああ神様ありがとうござります」言うて、私はおかげは何も頂いてませんけども、氏

子がおかげ頂いた。で、私「ありがとうございませう」ってもうすっかりお礼申させて、「すっかり信心させて頂きますんで、どうぞどうぞ……」「って、「もううちのバカ息子が、バカ娘が」とか言いながらも頭下げ、一緒にいっしょね。でも、気がついたらいないんですよ。ほんでまたどっかで苦しんでるんでしょかね。

ああいっのはね、ほんとうに神様にも相済まんですけど、「こちらも身の人間で御用さしてもらって、ああいっのは堪こたえますなあ、ほんとにね。あほらしくなりますよ。三代（尼崎教会三代教会長）のたまの先生が、よう口ぐせのようにな、「あほらし屋の鐘かねが鳴る」「ってよう言ってますわ。もうほんまにね。」あほらし屋の鐘が鳴るわ」「ってよう言ってます

たけどほんまにね、あほらしいですよ。

でも教祖様もいっぱい、このあほらし屋の鐘が鳴りっぱなしやったんでしようなあ。まあでも、そういうことじゃほんとにね、いけません。ほんとにね。かわいいですよ、氏子はね。でも、あまりのことになってきたら、たとえかわいくってもね、もうかわいさ余って憎^{にく}さ百倍、まあ憎いとまでは言いませんけどね、もうほんまにため息が出ますわ、そらねえ。

で、そんなにね、もう人間はそんなところがあるっていうことも承知してますから、そやけど散々言うてんのにまたこんなこと、しかも一回や二回^{むな}やなくて何度も何度もやってるなんて、はあ……って、情けないやら虚しいやらね、神様に相済まんやらってなりますよ。まあでも、そ

ういうことにならんように、死ぬまで一生お稽古けいこですから、死ぬまで、死ぬ時にしっかりとありがたい信心やったなあと、一生かけて信心するんであれば死ぬ瞬間に一番大きな信心できるように、そういうおかげを蒙まうらしてもらいたいですね。

ま、そのためにどうしたらええか言ったら、やっぱり信心のはじめを忘れんように、おかげ頂けるような信心を、せっかく手解てほき頂いて、稽古つけて頂いて、自分だって頑張がんばって信心もしたんでしょう。それでおかげ頂いたのに、それを忘れてしまっっていうんじゃあ、自分で自分の首しを締めとるんですから。そないならんようにやっぱり、お稽古さしてもらわんとあきません。そないならんように済むだけの環境は、全部用

意して頂いてるんですからね。

まあ神様に、もったいないことがないようにね。最後にみ教えをもう
いっぺんだけ読ましてもらいましょう。

「この神様のご恩が忘れられますものかいな。寿命じゆみようをつ
ないでいただきましたのですもの。これを忘れたら罰ばちが
当たります。一生忘れませぬ」とよく高言こうげんする者がある
が、よう覚えておらぬと、後から後から忘れるぞ。「この
大願成就のおかげをくだされば、金の鳥居をさしあげま
す。絹のお幟のぼりをお供え申します」と言うたりする者があ

るが、さあ、おかげを受けると、金の鳥居が小さいなまこ
（トタン）の鳥居になったり、絹のお幟が紙になったり
するのが、だんだんある。神様はそんな物をもらおうと
は思わっしゃらぬが、もったいないことじゃ。けれども、
一生忘れように忘れられぬようなおかげを受けながら、
そのご恩を忘れたら、自分が自分を忘れたも同然じゃか
ら、つまらぬ、もったいないことが、またできてきて、わ
が身が立ち行かぬようになるかも知れぬ。

一理解Ⅲ 尋求教語録 八八

「かも知れぬ」が怖いですね。はい、まあそないならんように、じょうや
ってご理解下さってね、教えて下さってるんですから、そないならんよ
うに、手元を大事に、神様によろお礼申し上げながらおす継りしながらね、
お礼申し、足りない行き届かないところがありますから、そこようお詫わ
び申し上げながらね、口先だけのお詫びにならんようにね、ほんとに改
まりを願っていかんとあきませんね。

今日は今日で一日、神様から真っ白な一日をね、頂いておりますから、
それぞれの背景はあるにしても、でもその時、その瞬間、神様に心を向
けて、今こんげつ今日、いつ、じゃない。「今月きんげつ」なんです、「今日きょう」なんです。

「今」なんです。その時その時、神様におつ継りして心を向けながら、神様

と共に生きさせて頂ける、そういう人間らしく生きる稽古けいこを、今日も一日、わが身わが一家を練習帳にして、お稽古させて頂きましょう。どうぞおかげ頂いて下さい。ご祈念させて頂きます。よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第二十話

令和三年一月二十日 朝の教話

令和五年三月十日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
